

まわりの人はわたしのことを「スリランカにはまってる」と言う。

紅茶と宝石とスパイスの国、スリランカ。アラビアン・ナイトの物語でシンドバットがこの国を訪れた話が出てくる。マルコ・ポーロの『東方見聞録』にもこの島の宝石の話が記されている。スリランカは「涙の滴」の形にたとえられるが、地図を眺めると、まさにインドがこぼした涙の一滴だ。面積はおよそ日本の六分の一、北海道をひと回り小さくしたくらい。人口は千八百万人。かつてはセイロンと呼ばれていた。

その形からわたしがまず思い浮かべるのは、皇后様がよくつけていらっしやるイヤリングだ。皇室の方々のお出ましのさい、ワイドショーはことのほかファッションに興味をもって放送する。当時テレビのリポーターだったわたしは、「皇后様の今日のお召し物は……」とリポートするなかで、「涙の滴型の真珠のイヤリング」という言葉を何度も口にした。わたしにとってスリランカといえば皇后様のイヤリングになっってしまう。

すっかりこの国にとりつかれているわたしに友人たちは、

「なんで、スリランカに行ったわけ？」

「スリランカって、どんなところ？」

「インドみたいな感じ？」

「スリランカのどこがよくてそんなに何回も行くわけ？」

などと聞いてくる。そしてわたしは、

「二、三時間かかるけどいいかしら？」

と決まって前置きをした。もちろん二、三時間も延々とスリランカの話をするつもりはない。魅力が多すぎて、語り尽くせないということなのだ。

あのとき、わたしはこの国についてほとんど知識ももたず、往復の航空券と数冊のガイドブック、それに英和と和英がひとつになった小さな辞書を旅行カバンに詰めて成田空港へ向かった。

アナウンサーに憧れて、テレビに出る仕事をはじめて十三年、大好きな仕事のはずなのに充実感が得られない。現在の自分の状況を分析し、将来を考え、ワイドショーのリポーターを辞めることを決めた。しかし辞めたあと、つぎの目標も定まらぬままにいたずらに月日だけを過ごし、

テレビを見て「やめなければよかった」と後悔する自分を発見しなくなかった。仲間の活躍をうらやましく思うことだけはしたくない。辞めたあとはずぐさまに違う環境に自分を置きたく思っ
た。

日本のニュースが届くところでは、「この事件取材しなかった」とか、「この芸能人にわたしならこれを聞きたかった」などと、テレビからの情報に縛られる気がした。しばらくのあいだテレビから離れて自分のことをじっくり考えたい。日本のテレビを見ることができないところに行きたかった。

スリランカを選んだのは不思議な赤い糸で結ばれていたとしか言えない。わたし自身明確な答えは見つけられない。英語が通じて、日本人観光客は少なく、日本のニュースも入りにくいところ。これが滞在地を選ぶわたしの唯一最大の条件だった。旅行しながら英語を今より少しはましに喋れるようになればいいと思った。旅行を兼ねて英語を学べる場所は、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、イギリス、もちろんハワイも……。しかし、こういっただころでは日本のニュースが容易に入ってきてきそうで、ひよつとすると知り合いにも出会ってしまいうそで、行く気にならなかった。

旅行関連の雑誌をめくっていると、スリランカのビーチ・リゾートに滞在して英語を学ぼうと

という企画を見つけた。かつてイギリスの植民地だったということで、ネイティブ・スピーカーの講師をそろえていると書いてある。わたしの周辺にスリランカに行ったという人をまだ知らない。この国なら条件にぴったりのだ。

しかし、どんな国なのだろう。かつて朝の番組で道行く人に英語で話しかける、英会話のコーナーをやっていたウイッキーさんの出身地がスリランカと何かで読んだことがある。わたしもウイッキーさんと同じ番組に地方局キャスターとして出演していたが、ウイッキーさんとの面識は二、三度だけだったし、特別な話をしたこともなかった。何かで読んだこれだけの知識が、わたしがスリランカについて唯一自信をもつて言えることだった。急ぎよ買求めたガイドブックで、紅茶、宝石の産地であることを知った。セイロンティーのセイロンとは旧国名を用いたものだったのか。お粗末な話であるがこのとき気づいた。

本屋の店頭にもスリランカ関係のものは少なかった。本を取り寄せるには、出発まで日にちがなかった。ワイドショーの仕事を通常どおりにこなしながら図書館に行くことも無理だった。なしにする休みというものはないほど働いていた。

成田空港で、外務省が渡航者のために提供している海外安全情報を手に入れた。出国ロビーに

置かれている機械で、スリランカの安全情報を検索した。「渡航延期勧告」という文字が飛び込んできた。「スリに気をつけましょう」程度なのが書かれているのだろうと気楽な気持ちで検索したが、「勧告」という言葉にドキリとした。

どういうこと？ 危険なの？

しつかり読もうと、もう一度画面を見た。

「北部州と東部州は渡航延期勧告、ヤーラ国立公園は観光旅行延期勧告、コロンボやその他の地域は注意喚起」と書いてある。さらに詳しく読まなくては……。

「コロンボでは、一九九六年一月に市内中心部にある中央銀行前でタミル過激派（LTTE）による大規模な爆破事件が発生し多数の死傷が出、邦人にも数名の軽傷者が出たことにより、二月九日付けで『観光旅行延期勧告』を発出した」と書いてある。

「その後はコロンボ地区では七月以降爆弾などのテロ事件の発生はない。無差別テロや外国人を狙ったテロ行為も今のところ起きていない。最近の治安情勢に鑑み、観光旅行延期勧告を注意喚起に緩和する」

テロが起きているなんて知らなかった……。

しかし去年の七月以降、テロは起きていないとある。一年間起きていないということは大丈夫なのか。あるいは一年間静かにしていたテロリストがそろそろ動き始めるころなのか。出発の時

間は近づいてくる。

「やめるなら今決めなくては……。どうしよう、どうしよう……」

少しの時間真剣に考えたが、現在治安が安定していない国だからこそ、その国を自分の目で確かめようと決意した。出国手続きをすませ、どこか馴染みのない匂いに包まれながら飛行機の座席に身を置いた。

到着したのが夜だったので、景色は何も見えていなかった。

この国で迎えるはじめての朝、外が明るくなるのを待つて、ホテルの部屋を出た。夜のあいだ、覚醒とまどろみの境を行きつ戻りつしながらも、一晩中聞こえていたのが波の音だった。

まず海を見よう。

砂浜では、ホテルのスタッフが砂かきをしていた。ホテルから海までがおよそ百メートル、そして海に向かって幅が二百メートルくらいだろうか。そこに高校野球の中継映像で見かけるような砂かき棒で砂に規則的な凹凸をつくっていた。

目の前に広がる海は、インド洋だ。

広い海にいくつもの帆船が浮かんでいる。カタマランと呼ばれる双胴船だ。

インド洋を見つめながら、正直に言うと、わたしの心はショックでガタガタだった。

「リゾート・ホテルに滞在して英語を学ぼう」という文句に惹かれたわけで、ハワイ・オアフ島のハレクラニ、マウイ島のグランドワイレア、マレーシア・ランカウイ島ザ・ダタイなどの、思いつき豪華なりゾートのイメージを膨らませていたのだ。

取材ではいろんなところに泊まった。事故や事件が起きると報道陣がつかめかける。現場に近いところに宿を確保したので、設備のいいところばかりではなかった。雲仙の噴火のときははるか以前に廃業していた旅館に無理を言って泊めてもらった。風呂場は鍵どころか、戸も閉まらないような状態だった。布団も重くてべっちゃんこで、心なしか湿気があった。阪神大震災の取材時も泊まる場所があるだけありがたかった。

取材では過酷なところに何度も泊まっていたので、自分でお金を出すときはある程度以上のところに泊まりたかった。

それなのに、それなのに……、このホテルはビジネスホテルに思える。ビジネスホテルが悪いわけではないけど、仕事を辞めてリフレッシュするために、ビーチ・リゾートに滞在するつもりでやって来たのだ。そもそもこの緑色の綿のベッドカバーはなんだあ！座ったら痒くなりそうな気がした（三日もすれば気にならなくなった。痒くもならなかった）。

レストランには蠅が飛び、隙があればカラスが食べ物をくわえて逃げ去る。野良犬だけでなく

野良牛があちこちにうろついている。砂浜には柔らかいものから乾燥したものまでさまざまな牛の糞が落ちている。その乾燥した糞が粉々になって竜巻のように砂といっしょにまいあがってくる。顔も髪もなんだか砂っぽい。自称「衛生オタク」のわたしは強烈な先制パンチを受けてしまった。

わたしが座右の銘としているのは、「災い転じて福となす」、「人間万事塞翁が馬」。たしかにシヨックだけでもの考えようだ。食欲のなくなるような環境は「ダイエツトしたい症候群」のわたしには打ってつけの場所ではないか。明日から今までとまったく違う生活を送ることになる。人生をみつめようとしているわたしにはびつたりの環境ではないか。

スリランカに来たわたし自身の判断を肯定したかった。

ホテルを変えることは簡単なことだったが、ここにいればわたしのなかの何かが確実に変わる気がした。

そして、旅行者にしては少々長い時間をこの国で過ごした。空気に含まれている香辛料の匂い、道ばたに並べられた色とりどりの南国のフルーツ、南西海岸でのマリンスポーツ、宝石探しの夢見る人びと、世界的遺産といえる壮大な遺跡の数々……。

乾いたスポンジが水を吸い込むように、わたしの目や心にはいくつもの風景や生活が飛び込んできた。

あれから何回スリランカへ出かけただろうか。